

蜃気楼

今日 あした

駅ビルの食堂街は、人の出入りのあわたたしい昼時を過ぎると、いつとき、さあっと空く時間がある。

矩子は、ちようどそんな時間帯にやってきて、ビルの中程にあるピンク色を基調にしたレストランの、高い背もたれのソファーに腰を落ち着けた。

彼女は、フラワーアレンジメントの世界ではちよつと、名が知られている。背は低く、小太りで、大きな目にインパクトがあり、凄みと愛嬌がないまぜになっっているような風体である。周りから先生と言われて、彼女自身、別に嬉しいわけではないが、言われるからにはいつも気を抜かないように心掛けている。注文したカレーを食べながら、ふつと窓の外に目を向けると、抜けるような青空が広がっていて、下を見るとロータリーの中心に銀杏の木が一本、陽に照り映えて白みがかかった黄色の葉をいっぱいにつけ、地面にも散り敷いて、そこだけが、まるでスポットライトを浴びた別世界のように浮かび上がっていた。

矩子はしばらくの間、スプーンを手に持ったまま食べることを忘れ、自然の造形の美しさに見とれていた。

今日から始まった展覧会の会場がある美術館から、ここに来るときにも見えていたはずなのに、忙しさにかまけて目に入らなかつたのかもしれない。

ふうつと息を抜いて、再び、遅い昼食のカレーを食べ始めた。

「ねえ、栗山矩子のクリスマスリース、良かったわね」

レストランの中だけではなく、通路からも音があふれている中で、とりわけ鮮明に矩子の耳に入ってきた。

ふむふむ。いい気持ちになった耳に別の声。

「そおお、ヨーロップピアンホワイトとかなんとか解説に書いてあったけど、白とグレーでちよつともよくなかつたじゃない」

ヨーロップピアンフラワーアレンジメントの今年のテーマカラーは白なのに：：：、教室の生徒ではないのだろうか。いずれにしても展覧会に行った帰りの人だろう。

矩子は主に先生たちを教えていて、すそ野は広くピラミッド型に大勢の生徒がいるはずである。

「あのグレーのホワホワ、どう見ても鳥の巣だったわよ」

ひととき大きな声が出た後、笑い声がおきた。それを皮切りに

「五十cmのリースが五万円だったわね」

「高い。ゴッドハンドね」

「雑誌で見たんだけど、栗山矩子って、ペンギンに似ていない？」

「似てるかも！」また、どっと笑い声。

「終わったら売れた分だけ、同じものを作るのでしょーう」

「弟子に流れ作業でやらせているんじゃないの？」

矩子は耳に入った言葉に「冗談じゃないよ、自分の作品を人に触らせるわけがないじゃん！」とムツとした。

この程度の話は、もう日常茶飯事に聞いているのに、気持ちのおさまりがつかない程いららする。急いでカレーを食べてしまい、傍らの水を一口飲むと、伝票を持って立ち上がった。

ピンクのモヘヤのセーターに、同じ素材の大きな花を肩の下あたりに飾り、羅紗の白いパンタロン、ブルーの上着を身につけ、大きなバッグを持って歩く姿はかなり目立つはずだ。

件の声のグループの脇を通過して出口に行くついでに、

「大きな声を出して！ みんな聞こえているよ！」

凄みを聞かせてひとこと言ってやった。だが気は晴れない。

駅ビルを出てロータリーを前に、銀杏の木を見上げる気も起らず、黄色い落ち葉を踏みながらさっさと通り過ぎ、広い歩道を歩き始めた。

普段から、矩子は自分に関する雑誌の記事や、インターネットの書き込みなどは、見ないようにしている。悪口など聞けば、腹が立つのは当たり前だが、そればかりではない。まったく見当違いのことを見聞きしても、それが意識の中に残って、創作するときに影響するのが嫌なのだ。

だが、聞こえてしまったものは仕方がない、と検証を始めた。あのクリスマスリースは、どれ一つとっても鳥の巣に見えるわけがない。ましてペンギンに至っては言語道断！

矩子は、いつも意識して傍若無人な態度を取っているのだが、こんなことがあると、本来は悪意に対してとても敏感なのだと思います、一層不愉快になった。

会場に入ると地区ごとにテーブルが分かれていて、順路の初めに横浜教室があった。

そこに、ことさら目に付く紺色に染色されたピンポン玉を小さくしたようなシュガーベリーが、二メートル位の高さから数珠のようにつながり、輪になって下りているのが目に入った。その所々には、ティンカーベルを模した透明感のある淡い色合いの妖精がまるで踊っているように飛んでいる。

又、中心のオブジェの周りには、作品が三点、どれもがお互いを引き立てながら生き生きしている。

「先生、いいでしょう、これ」横浜教室のリーダーの次朗が顔をほころばせな

がら、矩子の脇に立った。

三点あるどれもが、これ以上ないほど意匠をこらしている。花の種類も、色の数も、たっぷり使っているにも拘らず、全体的にまとまりがある。

「次朗君の演出？」

「いやあ、僕じゃなくて…、新入りの生徒が飾りつけをしたんですがね、いいでしょう、センスかな。彼女が手を入れたら途端に全体が生き生きして……。

彼女が作ったブーケが向こうにあるから、先生、ちよつと見てください」

矩子は次朗について行きながら、さっきまでのイライラをまだ引きずっている自分を持て余していた。

壁には、時期的にもクリスマスリースが掛けてあり、下の台には、窓飾りや、家庭でも飾るような小品、結婚式等で使うブーケが並べられている。

矩子自身の作品は、壁の中央の一番目立つところに掛っている、さつきレストランで話題になっていた、白とグレーを基調にしたものである。

「さすがですね、先生のリース、上品に輝いていますよ」

次朗がまんざらお世辞でもない調子で言った。

シルバーのリボンを見え隠れするように使って、葉っぱやラメ、フワフワの鳥の羽に至るまで、矩子自身でグレーの濃淡に染色したクリスマスリースは、どう見たって、躍動感があり、落ち着いた色使いにもかかわらず若々しく、自分でも惚れ惚れする逸品だ。これが「鳥の巣？」 馬鹿言っちゃいけないよ。矩子はまだ引きずりながらも次朗の言葉に救われていた。

次朗が案内してくれた作品は、一番隅に飾ってあった。

あらゆる色の大小の花を取りまとめた大ぶりのブーケは一見とりとめがなく、まとまりがなく、だが、グツとひきつけるものがある。

「いいでしょう、先生。才能が宿っているでしょう」次朗が力を込めて言った。作者は、フラワースクールに通い始めて半年にもならない、二五歳の女性だそうだ。

このブーケには「作りたくて作りたくて仕方がない！」というようなワクワクしている作者の気持ち素直に出ている。矩子はそう思った。小さくまとまることなく、真剣でのびやかなものを全体から醸し出している。

若い才能はどんどん芽吹いているのだ、と思うのと同時に、一抹の寂しさも感じた。

矩子は、ブーケを見ながら少し前に、似たようなことがあったなあ、と思った。

あれは、展覧会場の下見に来た時だから、一か月程前のことだった。

午前中いっぱいかかるつもりでいたのに、下見も打ち合わせも早々と終わったので、近くのお店でも覗いてみようかとぶらぶら歩いていると、近代的な意

匠を凝らした美容院があった。

ちらりと覗くと客の姿が何人か見える。

流行っているのだろうな、上手いと評判の店かも知れない。

普段の矩子なら、決まった美容師しか信用しないのに、久しぶりに大きな展覧会を開くので、気分が高揚していたのだろう。

「Beauty Salon Sou」とデザインされた文字の下に、漢字で「装」と書かれた自動ドアの前に立つと、すつと開いて、おしゃれな帽子をかぶったイケメンの店長がテーブルに案内してくれた。

次に現れた若くて可愛らしい、髪の毛の長い佐藤レイナという子が、担当してくれるへアーデザイナーだそうだ。

「ん、こんな若い子が担当？ 店は混んでいるし、一見の客だから文句は言えないが……」と不安を覚えながらも言われるままに鏡の前に座った。

矩子は六十歳だが、毛の質が良く、張があるので、黄色に近い茶色に染めた髪を、五分刈り位の長さにして、しゅんしゅんと立てた髪型にしている。その為に普段から頻繁に美容院に行き、髪の毛の手入れを怠らない。

「どうなさいますか」と聞かれて

「同じような髪にしてください」と注文した。

シャンプーをしてもらい、染めてもらい、又洗い流してもらい、熱いタオルを首の後ろに当ててもらい……至福の時である。

矩子は、元来、貧乏性で、他人に髪を洗ってもらう時、自分はなんと贅沢なことをしているのだろうと思ってしまう。まるでハーレムのようなではないか。

うとうとして良い気分になって、レイナさんに誘導されて席に戻り、目の前の鏡を見た。

「ん、カラーがいつもより明るい！」と思ったが心の中で妥協した。

いよいよ髪を切っていく。短いので、普段なら十五分もあれば終わってしまったところだが「遅い！」丁寧なのか、時間がかかり過ぎる。

気を紛らわせるために、見たくもない婦人雑誌を手にとると、見事な紅葉の庭園の写真が出ている。レイナさんは

「綺麗なお庭ですね」と機嫌を取るように言った。

「そうね」素っ気なく答えて、ページを繰りながら、この人、美容師になり立てじゃないのかしら、と疑心暗鬼になる。それを察したかのように、

「髪の上の方は短くして、横から後ろにかけては頭にじっくり沿うようにカットしていきますね」彼女は、もうそれ以上余計なことと言うまいと決めたように、それだけを笑顔で言った。

「脇が膨らまないようにお願いしますね」

矩子は「おっかなびっくり切っていないで、もっと短くしないと髪は立たないよ」と思いながら、本に目を落とす。しばらくすると、

「栗山さま、こんな感じで如何でしょうか」

「え、さつきと全然変わっていないじゃない、もう少し短く、髪が立つ感じにして下さい。」

いつの間にか十二時を過ぎ、沢山いた客は矩子一人になっていた。

「お客さまは、お近くにお住まいですか」

イケメンの店長が、いつまでも終わらない客の様子を見にきた。

「いいえ、来月、美術館の展示室でアートフラワーの展覧会を開きますの。今日は、打ち合わせに来て、前を通りかかったので、寄って見たのですよ」

「もしかして、栗山矩子先生ですか、雑誌で拝見していますよ。お会いできて嬉しいなあ」

「そういつて頂くと光栄です」

矩子は、愛想よく言い、ギョロツとにらんでおどけて見せた。

「先生、いつもと少し違うかもしれませんが、とてもお似合いですよ。佐藤は若いけど、なかなか腕の良いヘヤーデザイナーでして、指名して下さる方も多かったですよ。これからもよろしくお願い致します」

とりなしているのだろう。これ以上の意志の疎通は難しそうだと、切り上げた。

髪が定まらないと気分も落ち着かない。鬱陶しい気分のまま、駐車場から車を出して、逗子の自宅まで帰った。

家に着くと夫の蒼汰が庭の手入れの手を止めて車庫を開けてくれた。彼は矩子より十歳年上で、一年前まで、彼女とはまったく畑違いの小さな貿易会社を経営していたのだが、年も年だし、不景気で業績も思わしくないので会社はたんで、今はご隠居さんをしている。

彼は、矩子が大荷物運ぶのを手伝って一段落すると、コーヒーを飲みながらしげしげと見て

「髪型を変えたの」と目を輝かせて言った。

「予定より早く終わったから、会場の近くの美容院に寄ったのよ」

不機嫌そうに、ブスツと言うと、

「いつもとは違うけど、良いよ！ 若い子？ 美容師は」

「そう、若くて愚図で、必死で髪と格闘しているみたいだった」

「その子の情熱が見えるよ。品があつて可愛かっただろう、その子」
言われてみれば、少し太めではあつた。上品でどちらかという美人だったが、可愛げがあつたから、単純にかわいい子と思つたのかもしれない。

矩子はかなり頑固者だが、蒼汰の鑑識眼だけは無条件に信じているし、とても大切に思っている。

さかのぼること四十年前、矩子がフラワーアレンジメントの専門学校に通つ

ていた時、展覧会があり、蒼汰が彼女の作品に一目惚れした。

当時の矩子は、がむしやらだった。

親の希望通りの大学の法学部に入って、喜ばせておきながら、一年でやめてしまった。彼女を溺愛していた親は、風来坊では困ると、頭を下げて就職口を見つけてくれたのだが、そこでも、上司に文句を言い、女ばかりの職場は嫌だからと、ほかの課にしてもらい、その挙句、仕事が合わないからと、一年もしないで辞めてしまった。

親は、カンカンに怒り「もう、世話もしないしお金も出さない！」と宣言した。

矩子はやむなく、わずかばかりの蓄えをもって、友人の部屋に転がり込み、この道に進もうと、アートフラワーの専門学校に通い始めたのだった。

蒼汰は、作品とともに矩子にも一目惚れした。時々やってきては、彼女の友人達もひつくるめてお腹を満たしてくれる。

矩子のたつての希望である、子供はつくらない、という決心にも賛同してくれ、結婚した。

海外で勉強するための援助も惜しまなかった。

矩子は運が良かった。

蒼汰は、人間でも物でも、才能や、光っているものを見つけるのが好きなのだ。だから、貿易商のように世界中の色々なものを見る商売が自分には合っていると saying していた。

蒼汰が、褒めるのを聞いているうちに、矩子は鏡の前に立ち、この髪形、悪くない、と思い始めた。

しゅんしゅん立ってはいないが、大人しいわけではない。こんなに短い髪なのに、これだけの表情を出し切っている。

何故あの時、これが見えなかったのだろう。いや、見ようとしなかったのだろう。柔軟さを失くした自分は今もう若くないのだと思い知らされた気がした。

「せんせい」大きな声で呼ばれて我に返った時には、次朗はもう近くにはいなかった。

「明日、先生が実演される花が届いていますから、ご覧になって下さい」

矩子の店がある六本木の店長が、今回の展覧会を取り仕切っている。

矩子は急に体が重くなり、力が萎えていくような気がした。

季節に合わせて、照り映える紅葉をイメージして生花を頼んであったのだが、木や花を駆けこむ時の重さが重圧になって意識を圧迫する。もう若くないのだと……。

生花を扱うので、土日の、たった二日間だけの展覧会なのに、これまでの矩

子には考えられないことだった。

会場で色々な人としやべり続けながら一日目が終わった。明日は実演もある。この倦怠感を何とかしなければ……。

気分を変えるつもりで、思い立ち、藁にもすがる思いで、先日の美容院に行き、佐藤レイナさんを指名した。

イケメンの店長に代わって現れた彼女は、一ヶ月前に見た時よりずっと背が高く見え、豊かな髪を頭の天辺でまとめている髪型が、とても似合っていて、美しいと思っただが、矩子に向ける笑顔が張り付いたように、よそよそしかった。手順通りにシャンプー、ヘヤーカラー、カットと先月来た時とは違い、迷いなく仕上がった。

だが、鏡に映った髪は、一ヶ月前、矩子がくどいように言った、しゅんしゅん立った髪ではあったが、セオリー通りに整えた、まったく精彩を欠いたものだった。

美容院を出ると、今日の佐藤レイナは、文句を言う気すらなくすほど、魅力も可愛げもなかったと、改めて思った。

理由はなんであれ、若い芸術家が、心を打つ魂のこもったものを、出現させることができるのは、案外「不慣れ」だったりして……、ふいに笑いがこみ上げてきた。

いやまてよ、そうではない。

前に来た時、彼女は、初めから、雑誌に出ている栗山矩子だと、わかっていったのだ。

自分を試すつもりで、胸を借りるつもりで、カットとブローをして「これがあなたに一番似合う髪です」と、啖呵を切るような気分だったのだろう。

若いつて素晴らしいけど、傲慢なのよね。見切りをつけた途端、どうでもよくなつて、文句を言われないことだけに集中する。

矩子は、体がすっと軽くなった。若くてやる気満々の時は私だってそうだった。

日曜日、午後三時に実演が始まった。紅葉の燃える赤はきついなあ。昨日の段階で急ぎよ、すすきを使うことに決めていた。丈の長い、穂が開ききったホワイトゴールドの綿毛がふさふさしたものを使う。

中心に太い木の幹をドカンと据えた。そしてすすきをその周りに三角形に置いた。すると、冬に向かう荒涼として研ぎ澄まされた風景が頭の中に広がり、ひゅーっと、風の音が感じられた。

ここに、明るい光を……とイメージしているうちに、矩子の周りはしんと

り、音もなくなり、目の前は思った通りのすすきの原の景色で、光の明るさを求めて彼女の手が勝手に花を選びどんだん形になっていく。

彼女が別の境地に入り込んでしまったのを観客は感じ、会場は異様な空気で満たされた。

秋の空には、沈みゆく光、ではなく、希望に満ちた未来に続くものを描かなければ。

やがて、矩子の形作る世界に、ふつつつと、内側から力がみなぎり、明るい花々が醸し出す温もりのある恍惚の空間を、一瞬出現させることが出来た。

「出来た」

現実に戻り、人々のざわめきが聞こえる。

これは、緊張感の中でしか見えない蜃気楼かも……

実態の見えない、この瞬間にしか出現しない、観客と矩子が醸し出すオーラ。もう若くないのだもの、気持ちで勝負よ！

矩子は大勢の観客を前に、迷いを凌駕した満面の笑みで、自信を持ってわが作品を指し示した。

了